

「疑いの先にある信仰」 (ヨハネによる福音書20:19-31)

ご復活の主イエスは、「あなたがたに平和があるように」と、弟子たちの真ん中に現れてくださいました。しかし、なぜかそこに立ち会うことができなかったトマスは、主のご復活を信じることはできませんでした。彼は、復活が事実だということの確証を求めました。何とも人間臭い男です。

もしかすると、トマスは他の弟子たちが復活の主イエスに会ったことが羨ましくて仕方がなかったのではないかと思うのです。「傷を見るまでは信じない！」なんて、他の弟子たちに嫉妬して、ふてくされるほどに主イエスへの思いが強いトマス。何よりも、わたしたちはトマスがいてくれたおかげで、主イエスの優しさを知るのであります。傷を見るまで信じないと言ったトマスにも主イエスは現れ、ご自分の傷に触れるようにと声をかけてくださる。ここに主イエスの愛の深さを感じずにはいられません。「信じないものではなく、信じるものになりなさい」と言われたトマスは、傷に触れるまでもなく、「わたしの主、わたしの神よ」と言いました。つまり、トマスは主イエスを「神」として信仰告白したのです。これは、それまでどの弟子たちもしなかつた信仰告白です。トマスは、疑いました。しかし、疑いの先に主イエスに出会い、その愛に触れ、主イエスへの深い深い信仰へと導かれました。

信仰において、疑問を抱くことは決して悪いことではありません。それどころか、その疑問を主にぶつけるなら、トマスのように、深い信仰へと迎えられるます。しかし、主に疑問をぶつけぬままに自己完結してしまつては、信仰の旅はそこでストップしてしまいます。